

## 学習テーマ

## ① 漢和辞典を活用して、漢字力・語彙力を強化しよう

漢文の攻略には、句法のマスターとともに、漢字力・語彙力の強化が欠かせない。とりわけ、共通テスト漢文では語句問題でダイレクトに問われる。文中に出てきた分からない漢字は漢和辞典を引き、音訓や意味とともに、語源・熟語などにもあたってほしい。

## ② 傍線部中にある句法や語に注目して、選択肢の正誤を判定しよう

共通テスト漢文において解き方の基本となるのが、「傍線部中にある句法や語に注目する」という解法である。これは、解釈問題でも返り点の付け方や書き下し文を問う問題でも変わらない。一つの句法・一つの語に焦点をあてて、選択肢を絞り込む解法をマスターしよう。

重要  
問1  
語句問題

センター漢文では定番であった、漢字の意味を熟語で問う問題である。共通テストの試行調査でも出題されており(第8講で扱う)、今後も出題の可能性は高いので、語彙力の強化に努めたい。

- (ア) 「約」は、糸を引きしめて結び、目印とすることを表した文字で、「まとめる」(要約)、「つましくする」(節約)、「取り決める」(約束)などの意味がある。本文では、波線部の5行前に、漁師に魚の値段(直)を問うたところ、「三十銭也」と答えている箇所があるので、「取り決める」の意であると考えられる。これと同じ意味で用いられている熟語であるから、④「誓約」が正解と判定できる。

その他の選択肢の熟語は、①「要約」と⑤「簡約」は「まとめる」、②「節約」と③「儉約」は「つましくする」にあたる。重複しているものが正解とはならないので、実戦的にはこうした選択肢を消去して絞り込んでいくことも大切だ。

- (イ) 「道」は、首(頭)を前に向けて進んでいく様子を表した文字で、「歩くみち」(道路)から派生して、「行うべきみち」(道徳・柔道)、「みちのり」(道程)などの意味があるが、「言う・述べる」という意味もあることをぜひ覚えておきたい。本文では、「道」が動詞で用いられていること(送り仮名に「ヒテ」とある)、客語(目的語)が「先王の法言」であることから、「言う」の意であると考えられる。

そして、現代語でこの意味で用いられている熟語といえば、②「報道」くらいであるので、これも覚えておこう。「報道」は、報じる・言うと同じ意味を重ねた熟語であって、「柔道」や「剣道」の「道」とは意味が異なる。他の選択肢も見えておくと、①「人道」・③「道理」・⑤「道具」は「行うべきみち」、④「道程」は「みちのり」である。「道具」はもともと、仏道で用いる法具を意味する言葉であった。

【学習テーマ】で述べたように、**漢文で語彙力を強化するには、漢和辞典を引くこと**である。漢和辞典には、読み(音訓)と意味だけでなく、語源や熟語なども詳しく説明されていて、大いに役に立つ。漢和辞典をお友達にして、漢字に強くなってほしい。

正解 ア＝④ イ＝②

## 問2 解釈問題

まず、使役の「使」(し)をして(しむ)が用いられていることを踏まえて傍線部を直訳すると、「左右」に数のとおり銭で『之』に与えさせた」となる。「左右」の意味するものと『之』の指すものが解答のポイントとなるが、ここからは文脈で考えよう。

魚の値段は三十銭だ(三十銭也)と漁師が言ってきたので、魯公は、その金額どおり(如数)渡した、ということであるから、銭を渡した相手である『之』はもちろん漁師である。そして、魯公は自分で直接渡したのではなく、「左右」の者を使って渡したと考えられる(だから使役が用いられている)。

以上の内容を踏まえて選択肢を見ると、まず、「左右」を「行き交う漁師たち」「傍らの漁師」として解釈している①・②・③は誤り。④・⑤のように「傍らの従者」ととるべきである。次に、「如数」の解釈として、⑤「魚の数と大小を考えあわせて」は文脈に合わない。「三十銭也」と漁師に言われたので、④「求められた金額どおり」払ったということである。よって、④が正解と判定できる。

**選択肢を要素に分けて、要素ごとに正誤を判定していくという解き方**は、現代文と変わらない。このあたりは、共通テスト現代文の解法を、漢文にも活かしてほしい。

正解 ④



## 重要 問3 訓み方を問う問題

まず、「也」に注目しよう。「也」には、**断定の助動詞として「なり」と、疑問・反語の終助詞として「や」「か」の、三つの訓み方がある**。また、反語の場合には「ん(や)」と送り仮名をする。

選択肢を見ると、反語(約せんや)ととる①・②、疑問(約するか)ととる④、断定(約するなり)ととる③・⑤の三つに分かれるが、問2で見たとおり、漁師は「三十銭也」と言っていたのであるから、反語や疑問ととるのは無理がある。よって、この時点で③・⑤に絞られる。

残る両者を比較すると、③「爾に魚を貨るに」「⑤「爾の魚を貨らしむるも」という点が異なる。傍線部という「爾」は、漁師が魯公に言った言葉であるから、「魯公」を指す。漁師が魯公に魚を売ったのであるから、③のように訓むのが自然である。⑤は、「爾の魚」では魯公の魚ということになってしまふし、文脈的に使役(しむる)ととるのも無理がある。よって、③が正解と判定できる。

前問で、要素に分けて選択肢の正誤を判定するという話をしたが、そのときにポイントとなるのは句法や重要語である。**本問では、「也」に着目することによって、選択肢を二つに絞り込むことができた**。この後も、一つの句法や語に着目して解く方法は何度も出てくるので、しっかりとマスターしてほしい。

正解 ③

## 選択肢チエック

問3 傍線部B「始貨<sup>ニ</sup>爾魚<sup>ニ</sup>約<sup>ニ</sup>三十錢<sup>也</sup>」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

断定 or 疑問 or 反語

- ① 始め爾<sup>なまぢう</sup>に魚を貨<sup>う</sup>るも三十錢に約せんや。
- ② 始め爾の魚を貨るに三十錢を約せんや。
- ③ 始め爾に魚を貨るに三十錢を約するなり。
- ④ 始め爾に魚を貨らしむるに三十錢を約するか。
- ⑤ 始め爾の魚を貨らしむるも三十錢に約するなり。

使役はない

漁師は「三十錢也」と約束していたのだから、反語①・②・疑問④と  
いうことはない。

## 問4 心情説明問題

傍線部Cの直前に描かれている、魯公と漁師のやりとりをしっかりと読み取ろう。漁師の発言の中に「多其一」とあるが、ここで言う「一」とは、発言に続いて「還一錢」とあるので、「一錢」のことと考えられる。漁師は、魚を三十錢で売ると取り決めた(約三十錢)が、一錢多くもらってしまったので、返しに来たと言った。魯公は笑って受け取りを断ろうとした(笑而却之)が、漁師は聞かずに結局返して去っていった(還一錢、而後去)。そのような、漁師のやや頑固だが誠実な姿勢を、魯公は微笑ましく思ったのである。

以上の内容を踏まえて選択肢を見ると、「一錢多くもらったから届けにきた」「要らないと断っても、律儀に余分なお金を返していった」と事実関係を的確に押さえ、「好感が持てた」とする⑤が正解と判定できる。

①は「一尾足りなかった」、②は「一尾多く渡してしまった」、③は「一錢足りなかった」が、いずれも漁師の発言内容に合致しない。④は「値をつけるのが一錢高すぎた」が部分的な解釈としては可能であるが、「得したと思った」が魯公の気持ちからズレる。それではなぜこの話を筆者(魯公の子)が記したのか、理由が分からなくなってしまう。

改めて選択肢を見ると、「気持ち」を問う問題であるが、その「気持ち」を引き起こす(事実)に関する記述で正誤が判定できる。これは共通テスト小説と全く同じだ。さまざまな解釈が可能なの(心情)よりも、本文にはっきりと書かれている(事実)を踏まえて考えてほしい。

正解

⑤



## 選択肢チエック

問6 筆者は、この新開湖での出来事に触れながら、どのようなことを言おうとしているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 当節の高官の中にも、わずかな利害にとらわれず節操を守ることのできる者がいて、彼らは新開湖の漁師のような隠者と心を通じ合える、ということ。
- ② 当節の高官の中には、わずかでも利害がからむと節操を守ることのできない者がおり、彼らは新開湖の漁師に及ばない、ということ。
- ③ 当節の高官の中にも、わずかな利害にとらわれず節操を守ることのできる者がいて、彼らは新開湖の漁師にまさる、ということ。
- ④ 当節の高官の中には、わずかな利害にさとく了見の狭い者が多いので、彼らは新開湖の漁師のような隠者とは心を通じ合えない、ということ。
- ⑤ 当節の高官の中にも、わずかな利害にとらわれず昔の聖王の言葉を守っている者がおり、彼らは新開湖の漁師に劣りはしない、ということ。

未必能

部分否定(必ずしも～ない)

不可能(～できない)

### 学習アドバイス

初講ということで難易度の高い問題を用意したが、選択肢の正誤を判定するポイントとして、句法のほか、人物関係・指示語など、ひとつおりのものが出てきた。共通テスト漢文で確実に高得点を取るため、よく復習して、選択肢の絞り方を磨いてほしい。

### 第1講 解答欄

問6	問5	問4	問3	問2	問1
②	①	⑤	③	④	ア ④
9	8	8	7	8	イ ②
					5 × 2 = 10

合格点  
41点

50

## 書き下し文

大観の末、魯公宮祠を責めて浙右に帰る。吾公に侍して舟行し、一日新開湖に過り、漁艇の往還上下するを睹る。魯公吾に命じて一艇を呼び得て来たらしめ、戯れに魚を售ふこと二十鬣ばかりなり。小大又た齊しからず。其の直を問へば、曰はく、「三十銭なり」と。吾左右をして数のごとく銭を以て之れに昇へしむ。

去り来たりて未だ幾くならざるに、忽として遙かに槩艇の甚だ急に、飛びて大舟を趁ふを見る。吾と公と咸愕然として謂ふ、「此れ必ず大魚を得たるか。將に喜びて復た来たらんとするか」と。頃くして已に及べば、則ち曰はく、「始め爾に魚を貨るに三十銭を約するなり。今乃ち其の一多し。是を用つて来たりて爾に帰す」と。魯公笑ひて之れを却く。再三なるも可かず。竟に一銭を還し、而る後去る。魯公喜ぶ。吾時に十四なり。魯公に白す、「此れ豈に隠者に非ずや」と。公曰はく、「江湖の間、人の市廛に近づかざる者類ね此のごとし」と。

現代語訳

宋の大観年間の末年のこと、父の魯公は宮祠の任を務め終えて隠居所の浙右に帰った。私は魯公のお供をして舟で行き、ある日、新開湖を過ぎたあたりで、小さな漁船が行き来するのを見た。魯公は私に命じて一艇の船を呼び寄せさせ、おふざけで二十尾ほど魚を買った。魚の大きさはふぞろいだった。値段を問うたところ、(漁師が)答えるには「三十銭です」と。私は傍らの従者に命じ、求められた金額どおりお金を渡させた。

漁船が去ってからいくばくもしないうちに、突然遠くに急いで(私たちの乗る)大舟を追ってくる姿を見た。私も魯公も驚いて言った、「きつと大魚を得たにちがいない。それで喜んでもう一度売りに来ようとしているのだ」と。しばらくして(私たちの舟に)追いつくと、漁師が言うには、「さきほど三十銭という取り決めで魚を売りました。ですが一銭多くお支払いになっていました。それで返しに来ました」と。魯公は笑ってそれを断った。(しかし)何度断っても漁師は返すと言って聞かなかった。結局、一銭を返して去っていった。魯公は(そのさまを)とても喜んだ。私はその時十四歳だった。魯公に申し上げるに、「あの人は隠者だったのではないですか」と。魯公が言うには、「浙江から新開湖のあたりで生活していて、商店のある街に近づこうとしない者はたいていこういうものだ」と。

私は常日ごろこう思っている。当節の朱紫を着る高位高官どもは、聖王の遺した言葉を口にして、士君子と呼びならわし、さきばらいに従えて、堂上に坐して、貴人と言う者は多けれども、ひとたび自らの利害にかかわるや、わずかなものまでも比べたてるに及んでは、その守るところは、必ずしも全員が新開湖の漁師に肩を並べることはできないのである。それゆえ書き記した。

## 重要語句

- 命 文脈使役で「〜にめいじて〜(せ)しむ」と訓む。本文でも、「来」に「タラシメ」と送り仮名がされている。
- 竟 副詞として「つひに」と訓み、「結局」「最終的に」の意。「終わる」の意の「畢」と重ねた熟語の「畢竟」も、同様の意で用いられる(第3講問1で後述)。
- 白 動詞で「まうす」と訓む。「告白」「独白」などというように、「白」には「言つ」の意がある。
- 如此 慣用表現で「かくのごとく」と訓む。「このように」の意。